

特別寄稿

オリンピックの前に知っておこう

日本の素晴らしさ

⑥

(株)人間と科学の研究所 所長 飛岡 健

〈Ⅲ-5〉日本人の親切さとやさしさと物への思い

さて、日本人の手と頭について話をしてみました。日本人の心に関しては、どのようにその素晴らしさを語れるのでしょうか？

多くの外国の方々が、日本に来ての印象を聞くと、「日本人は親切で優しい」、そして「物を大事にする」という点が挙げられる事が多いです。確かに、日本人は、「おもてなしの心」や万物に対しての「慈悲の心」を基本的には持っている人が多いと思います。

外国に行った時、もち論例外はありますが、レストランへ入って食事をする時、多くのケースで対応する店員さんはぞんざいで、運んできたプレートもドカンとテーブルに平気で置いたり、少々汚れていても気にしません。そして、マニュアル以外の事はしません。むしろ余計な事をやると、自分の責任にされてしまうし、他の人に俺の仕事を奪うなど言われてしまいかねませんので、余計な事はしない主義なの

です。それに対して日本人は、「おせっかい！」と言われる位に、対応してくれる事が多いのです。おそらくそういう日本人の振る舞いが「優しい」という言葉に繋がるのでしょう。

あるいは外国の留学生が来日したり、お客様がいらした時に、本当に心からの接待をする事が多いのです。飛行場まで迎えに行き、家まで連れていき、お風呂に入れて、美味

野口英世	イギリス領ガナで、黄熱病の研究
杉原千畝	リトアニアカウナス領事代理 ヨーロッパ各地から逃れてきたユダヤ人に出国出来るように
和歌山 串本住民	トルコ軍艦エルトゥールル号が台風によって座礁。六百名近くが遭難 村人が助ける
八田與一	台湾南部において、ダムと様々な給水路を造る 大正九年
西岡京治	ブータン農業を広める 一九六九年

図17 日本人の親切心の例

しい食事を出し、布団を敷いて休ませ、朝には食事を出し、必要であれば観光に連れて行き、等々実に周到の心配りをする方が多いのです。もち論、外国の方々にもそうした事をされる方もいますが、日本人程、下手をすると女中や下男がかしづく位に接するケースはむしろ少ないでしょう。要は腰が低い民族なのです。

昔の武士は、「朋遠方より来る」という機会があると、貧乏で何も出来ないような状況でも、刀を質に入れて接待をし、お土産まで持たせたといえます。「武士は食わねど高楊枝」という位に「武士の心構え」は立派でしたが、それだけでなく、本当に人を大切にしたいようです。それ位に日本人の心使いは高く、清潔で立派だったのです。もち論、いつの時代にも例外があります。ここでは平均レベルの話をしていきます。

最近大分話が表に出てくる事が多くなりましたが、歴史的にも日本人の親切心の発露を示す逸話が残っています。**〔図17〕**

武士だけでなく、商人も、町人、職人もまた、日本人は「親切」「やさしさ」あるいは、「物への温かい思い」を宿

していたのです。最近ちよつと変化してきていますが、それも世界レベルか

ら見れば称賛出来るものが残っているようです。

Ⅲ-6 自然災害に対しての技術は一日の長、一生と死の関係

次に災害天国日本の技術に目を向けてみましょう。ご存知のように、日本

は自然災害大国です。古今東西至る所で大災害が生じています。その為に日本人は自然災害に対して様々な英知を働かせ、その災害に対応してきました。

それでも自然の猛威には、人間の力は圧倒的に無力と言わざるを得ません。阪神大震災、東日本大震災、熊本地震

北海道地震等々、ここ20年間位に、世界の人達には想像出来ない程の大きな災害を受け、国土強靱化計画が打ち出されています。しかし、殆ど何も出来ていません。というのも自然の猛威は凄まじく、災害を二次的に防ぐ事は出来ても、災害そのものは今のところ

人の知恵では防ぎ切れないのです。例えば台風の進路を変えさせようとする

と、核爆弾を数1000発（今のアメリカの持っている核の全数量位）を爆発させないと変えられないと言いま

でも経験させられます。私は良く飛行機に乗り、夜の時間帯を飛ばすことが多いのですが、銀座や大阪の新天地、博多、すすき野の夜の街の中にいる時には、街中のネオンサインの明るさに驚きますが、飛行機の上から

見ると大地の一部がほんのちよつと薄明るく光っている程度なのです。ところが、朝太陽が顔を出すと、この広大な地球上が一遍に明るくなるのです。

原子力発電所、火力発電所が何万基出来ても、そうはならないと思います。まさに偉大なるお天道様です。それに

比べると人間の出来る事、してきた事は大自然の前ではある面でほんの僅か

のようです。しかし、環境問題のようなケースに

おいては、その蓄積が問題なので、少し状況が異なります。アメリカのNASAの環境問題を監視しているチームは、第二次産業革命以来、人類の出した環境汚染物質の蓄積量は既に限界で、今すぐ排出を止めても、地球上の環境問題の悪化は止むどころが、更に進むだろうとの予測を出しています。困ったものです。

その話はさておき、地球の部分的災害問題に対しては、日本はかなり世界に対して進んだ技術を開発してきています。環境問題と災害問題は大きく分けて三つに分けられます。

1 悪くなったところを改善する

2 今良い所を保全する

3 より良い環境を創造する

阪神大震災 1995年

東日本大震災 2011年

熊本地震 2016年

北海道地震 2018年

例えば、河川の災害を考えてみましょう。河川のもたらす災害は



河川改修工事技術



ダム建設技術

- 2 水が干上がる
- 3 水が汚れる
- 4 e t c .

ですが、日本はこれらに対して優れた技術を開発してきました。どのように水を流すかの流路の変更、あるいは輪中のような技術や様々な築堤技術が作られました。更には放水路の技術、水門の技術、ダム建設の技術等々色々あります。そして、水を浄化する技術も世界有数の技術を有しています。

こうした日本の天災についての寺田寅彦先生の有名な『天災と国防』という本がありますが、日本人の遺伝子の中には、天災に対しての死の恐怖の



『天災と国防』
寺田寅彦

ようなものが入っているのではないかという事が書かれています。また「天災は忘れた頃にやってくる」という有名なフレーズも、この本の中に登場します。

そして多くの災害から得た先人達の知恵が発揮され、それが記録に残されているが、今日の人はその知恵をないが

〈Ⅲ-7〉日本人のチームワーク

しろにしてしまっていると言います。更に死に対しての心構えが、生に対しての真摯な考え方を生み出しているとも語っています。しかし最近の日本人は、身近なところの死から遠ざかり、ゲームの中の簡便な死を見て育っている為に、生に対しての真摯な心構えを失っているのではないのでしょうか？折角の先人達の知恵を日本の為にももっと活用すべきですね！

良いか悪いかの判断は難しいところですが、多くの海外での工事現場において、日本人の組織力やチームワークが素晴らしいと評価されます。多くの海外の方々も自分の専門とか、契約した内容の事しか責任を持ってやらない人が多いので、完成が遅れたり、技術の隙間の所で事故が生じたりすることが多いのです。むしろ余計な事をやって、責任を転嫁されるのではないかと懸念を持つ方が多いのです。

傘を壊してしまいました。その時傘を壊した子供は、「ごめん！」ではなく、損害保険番号を教え「これで弁償するよ！」と言ったというのです。どういう意味か判りませんが、契約社会の凄さを知ったような気分でした。

と懸念を持つ方が多いのです。笑い話ですが、ドイツで二人の子供が遊んでいて、一人の子がもう一人の子の傘を借りて遊んでいた時に、その

助っ人として馳せ参じて、一緒に仕事を早く終わらせようとして頑張るのだから、他の仕事を早く終えた人々が助っ人として馳せ参じて、一緒に仕事を早く終わらせようとして頑張るのだから、海外の方々の多くは、自分の契約（ルール）を終えたら、我関せ

ず、で引き上げてしまう事が多いのです。まさに文化の違いです。

従って海外では日本人に頼むと、納期が守られ、確実に仕上がるとの評価が高いのです。何とも自慢出来ることです。しかし時として、自分の契約以外の事を外国人との共同作業の時にすると、「俺の仕事邪魔するな！」と怒られることもあるようです。中々難しい事だと思います。しかしそれ位、仕事に取り組み姿勢や慣習や法律が、更には文化が違うという事です。

この日本人のチームワークは、日本の大災害が起きた時に発揮され、日本人はあれ程の災害に遭っていないながら、慌てず、落ち着いて、協力して事に当たっているとの評判を呼びました。日本人には自然災害に関して、諦観みないなものがあって、「地震・雷・火事・親父には勝てない」と考えるのです。親父は自然災害ではないですが。従って「起こってしまった事はしょうがない」と素直に諦めてしまうのです。いつまでも天災にめそめそしていてもしょうがないと思えば、その後の行動を起すのです。

そしてかつての運命共同体としての村落での共同作業の如くに、天災の

私は『日本の技術はなぜ優秀か』
 と言う本を、約30年前に書きました。
 その本の中に当時の世界一の技術を
 数十例を図で示しましたが、今や全
 減なのです。それをここで示してみ
 ます。これらに代わる技術が確かに
 出て来ていますが、しかし、かなり
 の技術が基幹技術なので、これらが
 今、1つも残っていないという事は、
 かなりの不安になります。技術の世
 界は追われるのが常です。そして「後
 追いのメリット」があるので追い越
 される事も多いのです。それは一定
 程度でしょうがありません。しかし、
 それ以上に新しい技術を作り出して
 逃げねばトップの座は保てないので
 す。その力は、日本人がその気にな
 ればまだあると思います。現実的



『日本の技術はなぜ優秀か』
 PHO研究所

Ⅲ-8 昔の世界一の技術が今や全滅
 ！ 新しい技術は何処に！

後始末をするので。その姿が外国の
 方々に「感動的」に映るのです。こう
 したチームワークの良さや、組織力は
 皆でやる仕事の時には良いのですが、
 ひとりひとりやる仕事の時には依頼

心強いことになりかねません。何事
 にもマイナスの部分があります。
 でも人間社会は皆でやる事が多いの
 で、日本人の組織力、チームワークは
 とても優れた力だと思えます。

には少し「怠け者」になっているよ
 うです。もう一度頑張って世界一を
 沢山揃えたいものです。しかし、少
 し細かく見ていくと、まだ世界一の
 技術はかなり生産財や素材の分野で
 は残っています。中国産の機械等
 も、例えば「i Phone」等でも
 日本製の部品が半分以上にも達する
 機種もあります。少し世界一の見方
 を考えねばならないでしょう。完成
 品としては少なくなってきたので
 す。

「生産台数、生産量世界一」

品名	日本	米国	その他
1位 冷蔵庫	1058.1万台	536万台	
2位 洗濯機	457.2万台	332.8万台	
3位 電気洗濯機	402.0万台		
4位 電気掃除機	318.2万台	226.8万台	

品名	日本	米国	その他
1位 自動車	914.3万トン (41.1%)	218.2万トン (8.8%)	
2位 船舶	546万台	442万台	
3位 船舶	14317台	7115台	
4位 船舶	1万4900台	250-300隻	



「日本企業の独占」

品名	日本	米国	その他
1位 特殊技術	118	141	143
2位 精密技術	4154	385	276 14%
3位 特殊技術	464.8万台	227.0万台	

「他国を寄せ付けない
 特殊、精密技術」

『日本の技術はなぜ優秀か』から抜粋

自分の主体性を自ら決めるに際し、
運命共同体の村落の人々を意識し
て、それに配慮して決めるのです。
それに対し、多くの欧米の人々は、
神との対峙を優先し、その関係の中
に自分の主体性を決め、その上で周
囲と接します。これを「個人」とい
う訳です。間人主義(OUTSID
E IN)と個人主義(INSID
E OUT)と表現します。

次に水田稲作農業は引く力を用い
ますので、それに相応しい力の使い
方が他の場面でも中心となります。
これに関しては、既に他の章で取り
上げ詳しく説明しています。

そして日本人の特色の一つは、お
米から実に多様な物を造り出し、多
様に活用している事です。それは**図
18**に示してあります。まさに多様な
派生物を作り出しています。これが
日本人が改良品を巧みに造り出す能
力に重なっているのです。

更に一つの場合(田んぼ)で収穫を
上げるには、田んぼという工場の性
能を上げねばならないので、一つの
場を徹底的に研究するという指向性
と能力を持ったのです。狩猟民族の
ように、より良い獲物を求めて移動

するという形を、定着型の水田稲作
農業の為に取る事が出来ないのだ
です。その為に大自然を細かく観察し、
その結果として得られた自然の英知
を巧みに自らの田んぼでの収穫作業
に活用する事によって、より良い収
穫を上げて行つたのです。
また自然への感謝と崇拜の念、逆
に畏怖心、自然の脅威への恐怖心と
を併せ持っているのが日本人です。

Ⅲ-10 日本の「道」を作り出す能力

今日アジアやヨーロッパで、日本
で独自に発達した茶道や盆栽が流行
しています。全体として日本熱が高
まっています。まっとうな動きなので
しょう。

しかし良く考えて見ると、茶道の



『茶経』 陸羽

元となる「茶」に関し
ては、元々中国で始
まった営みでした。秦
の時代に中国のお寺で
お坊さんが仏像の前で
修行する時に眠くなる
ので、お茶を回し飲み
したことが茶の最初と
言われます。その頃の
茶に関しては、「茶」
のバイブルとも言える
『茶経』(陸羽)に詳し
く書かれています。し
かし中国で茶は盛んにな
ったのに、そして『茶
経』のような素晴らし

い本まで書かれたのに、日本の「茶
道」のような極めて深味のある人間
の営みは生まれませんでした。とこ
ろが日本では、その中国生まれのお
茶を一つの道としての「茶道」に確
立したのです。それではお茶を飲む
事から、それ以上の存在に高めた茶
道とは、そしてそもそも「道」とは
何かを、ここで考えると共に、日本
人の「道」を造り上げる生き方の素
晴らしさに触れてみましょう。

日本には**図20**に示したように、多
くの事柄に「道」にしてしまう得意
技があります。単なる術や技とどう
違うのでしょうか？

日本人はどういう訳か、全ての生
活行為を最終的に「人間の完成」と
いう形にもつていこうという性質を
宿しているようです。

単なる技や術を、練習、訓練、鍛
錬をして身に付けるだけでは満足せ
ず、即ち修練、修業、修学のように「修
める」ことを意図するのです。その
「修める」、「究める」とは、お天道
様に顔向けの出来るように、そして
自らが悉皆成仏の一員となるべく、
人間の「生理・心理・精神」の全て
を磨く事です。

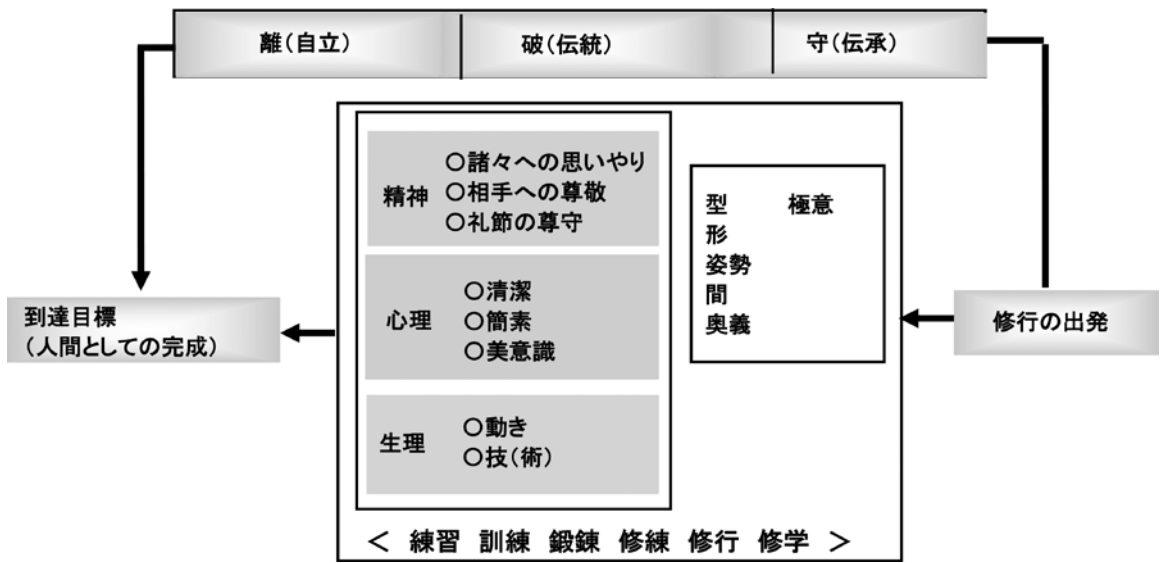


図19 道としての完成

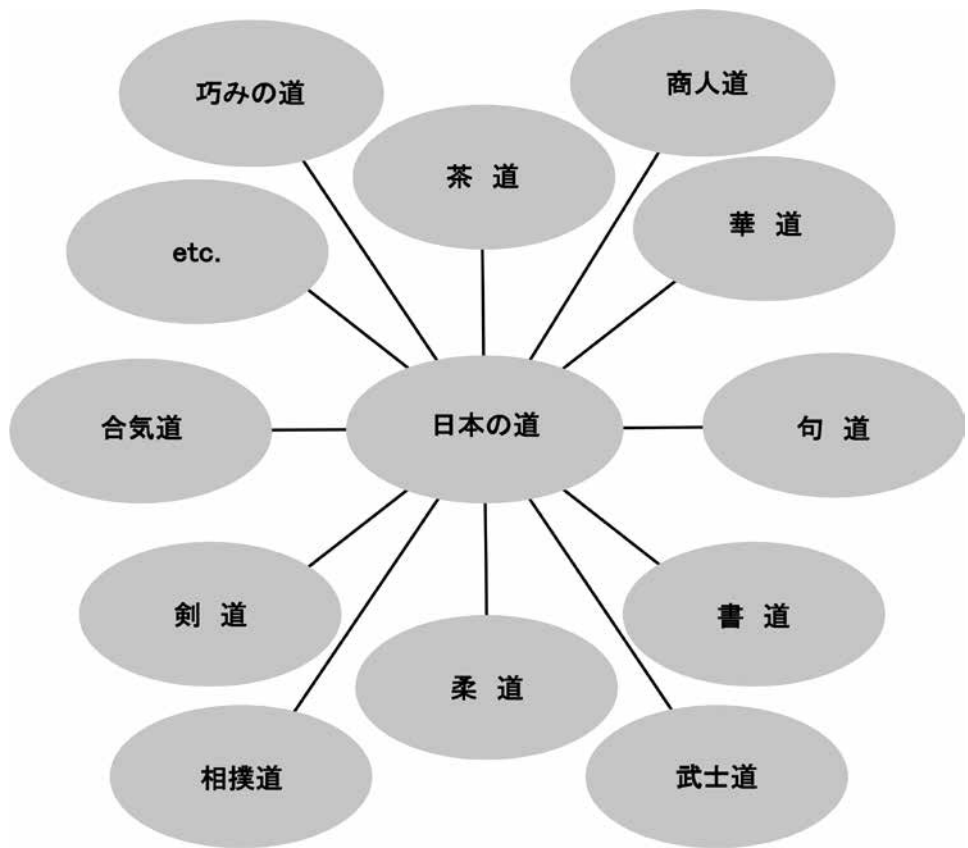


図20 日本の道の様々

生理的には、その機能を高めて働
きを良くすることです。「茶道」で
言えば、お手前の所作を滞りなく、
手際良く行う能力と言えるでしょ

う。心理的には、美的要求が入って
きます。そのお手前をいかに無駄な
く、美しく、そしてつつましく、優
雅に、かつ凛々しく行うのかです。

次に精神的には礼節や相手への尊敬、敬意、更に関係するもの全てへの感謝、そうした関連する全体を高次のレベルに誘おうとするのが「道」という世界なのではないでしょうか？

そのように日本人は、様々な修学（修行を通して「守 破 離」という言葉の如く、まず伝えられたものを承ります」という形で、「守」を実行し、次いでその時代の息吹きを取り込み、それと伝承されたものを統合し、伝統として築き上げ「破」を行い、自らの流派を起して離れていくという流れを辿るのです。そこでは何よりも「人間」として仏に近づく営み、「人間」として心身の動き、働き、働きの完成」を目指しているのです。本当にこうした「道」を目指すという風習や文化は素晴らしいものです。

お茶会では、主人がお客様を外で見送りますが、その姿が見えなくなつてもしばらく頭を垂れて見送る事が当たり前なのです。心からお客様を。一期一会の出会いを大切に感じておもてなしをするのです。何とも高い精神の動きではないでしょう。

Ⅲ-11

日本の禅の教えがもたらす世界
世界中の人々が日本の禅寺で修行

今日の世界の動きは、言葉が中心となつていますが、この言葉が作つてきた壮大な世界の素晴らしさを知ると共に、その言葉が人類そのものを快楽園から失楽園に落としている事も否定出来ません。良く人々は「言葉なんて！」という表現をする方々がありますが、私はそれには賛成しません。言葉の効用を良く知っているからです。しかし言葉の限界は明確に感じている一人です。

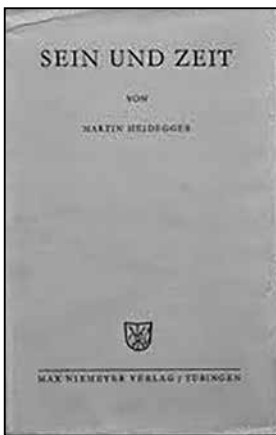
そうした状況において、日本の14世紀頃の禅宗の道元禅師の著した『正法眼蔵』は分別、即ち世界を分断して様々に分けて言葉にし、それを操つて、煩惱を生み出し苦悩する人間が、言葉を駆使するのみで、安寧の境地を達する事は難しい事と悟り、只管打座の教えを生み出し、ただ座禅を組み、無念夢想の世界に入つて行く努力をする事によって無の境地に誘われる世界を提唱したのでした。

しかし道元禅師は言葉を用いて、仏教百万巻の書を深く学び研鑽され、その上で「分別」では到達出来ない境地を語られているので、言葉で到

達出来る深奥には到達していたのです。そして1度既に触れましたが、それを十分に学んだ鈴木大拙師は、その当時のヨーロッパの偉大なる哲学者ハイデッガーに『正法眼蔵』を唱いたのです。するとハイデッガーは、その時書いていた『存在と時間』（SEIN UND ZEIT）の執筆を途中で止めました。それは「私が論考思索していた事を、14世紀の道元師が既に論考し抜いていた」ことを大拙師の説明から了解したからでした。これは凄い事です。これは映画『アマデウス』の中で、当代一の宮廷音楽家のサリエリが、モーツアルトの楽譜を見て、その天才の才を見抜いた事と軸を同じくします。偉大な人は偉大な人の事を理解出来るのです。



『正法眼蔵』
道元禅師著



『SEIN UND ZEIT』
ハイデッガー

の人々に、日本文化とその中核の思想としての禅を知らしめるものとして書かれました。そこには、日本の俳句、刀、剣道等代表的事例を用いて説明がなされていますが、そこに記されている通り、それらは禅と深い関係を持っています。日本の重要な文化はことごとく、禅の教えを深く受け継いでいるのです。

何よりも禅の極意への接近は、自らの存在を「空」にする事ですが、これは周囲に察知されないことでもあり、自らも「空」になることです。そこでは無我になれば我が無いのですから、誰もそこにある我を察知出来なくなることになります。

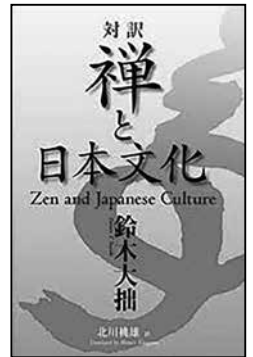
一人内観する形で、「空を空にして空の如く観ず」という世界が広がるのでしょうか。「でしよう」と書いたのは、私はまだその境地、世界に到達していないからです。

しかし、人類は今日多くの人々が、この分別（≡言葉、概念）の世界が造り上げている世界（≡バベルの塔）に疲れ、より深く静寂の世界を求め始めているように見えます。そうした時に日本の禅の世界は世界中の人々にとって魅力的だと思いま

す。いつしか世界中の人々が高山を訪れたり、日本中の禅寺を訪れたりする時が来るのではないのでしょうか！

日本語は世界的に見ても、人間の微妙な奥行きを表現する言葉を沢山持っている言葉です。

従って、日本語による思索は、他の言語に比べて実に人間の心や精神の奥深くに入っていく可能性ががあります。その日本人がその最深度まで言葉を用いて接近した結果が、言葉



『禅と日本文化』
鈴木大拙

を越えた。禅の世界。なのです。

これから世界の人々が、益裁を深く理解し、日本茶の作務を行うようになってきた如く、禅を学び実践する時代が到来する事でしょう。

Ⅲ-12 日本の技術能力を世界に解き放て

今から150年前の1868年に

明治維新が始まり、西洋科学技術文明が取り込まれ、追い付け、追い越せが始まりました。最初の頃は、殆どを西洋から指導を仰ぎましたが、30〜40年、即ち明治時代に世界に追いついたのです。もち論、都市空間の壮大なる建設を始め、その中の蓄積レベルは別です。歴史の長さが異なります。しかし、西洋の開発した

多くの技術を日本は短時間で独自に作れるようになったのです。そして、

それ以上の技術を改善改良し、逆に世界に送り出しているのです。

この辺りは、2018年の末から、2019年の3月にかけて、上野の国立科学博物館で、「日本を変えた千の技術博」という特別展において詳しく述べられています。その時に出版された本があります。そして30

〜40年位経つと、世界に先駆けた科学技術が世界に公表されるようになってきました。そして第2次世界大戦前まで、日本の科学技術は世界でも有

数のレベルになっていたのです。ところが第2次世界大戦で完璧に日本は破壊され、戦後のGHQの命令で飛行機を始め、多くのモノの研究や生産を禁止されました。

しかし、その後朝鮮動乱を契機として、日本の経済は復興すると同時に、日本の科学技術も著しい復活を遂げ、更に先端科学技術分野において、日本発のモノが登場するようになっていました。何とも素晴らしい事ですが、後発の中国が既に先進国をキャッチアップし、短時の努力で、『製造2025』を発表し、多くの分野で世界一を目指しています。果たして日本はどのようになっていくのでしょうか？

日本人の今日の働き方、費用、国民の数、そういうもの全てが日本は相当劣っているのです。中国に敗けていく可能性が高いのです。しかし、精一杯努力して、勝てるところは勝つていかねばならないのです。

私はまだ日本の科学技術研究の開発の体力は、かなり残っていると考えている一人です。例えば、その国の研究開発のインフラの整備に関しては、スタンフォードインデックス

という指標がありますが、それは日本が世界一なのです。

しかし中国の深圳で部品を集めると3日間で集まるものが、日本では3ヵ月かかるという状況が訪れています。金型という製品製造の基礎となる作業に関しても大きな時間差があります。これではスピードにおいて勝てません。今日、日本の独自の「のんびりリズム」がはびこり、何が何でも、この期間にやってしまうのだという「ガンバリ精神」が弱まってしまうように思います。

〈おわりに〉
日本の若者の可能性を信じよう
スポーツの活躍が更に他の分野に！

私はこの本を書かせていただきましたが、常に考えている事があります。今の日本人の若者にもっと自由に働ける場を与えたら、きっと素晴らしき若者達が続々と各方面において輩出するに違いない、という確信でした。

現在、日本の若者がスポーツ分野で著しい活躍をしています。卓球、バドミントン、フェンシング、フィ

だが中国では、半導体の製造は世界10位に入って入る企業はありませんし、遅れている部分もあります。そのあたりを徹底的に考察して、日本の強みを生かしていく事です。

この本は「日本の強み」や「日本の素晴らしさ」を語る本であると同時に、この本を読んだ人が「日本の良さ」を自ら発見する契機にして欲しい事と、自ら「強み」を創造して欲しいと思って書いている本でもあります。

ギョアスケート、野球、等々の如く

です。それ以外にもテニスのチャンピオンとか、音楽、絵画、ダンス等の世界でも若い選手が活躍しています。日本国内においても、文学においても、演劇においても優れた若者が登場しています。加えて学問の世界でも若い人々の活躍が目立ちます。私はこうした若い人の活躍が世界

でも、技術の世界でもビジネスの世界でも、政治の世界でも、スポーツのように活躍するようになるのではないかと予想しています。その為にも今の日本がすべきは三つの事です。

- 1 もっと心身を鍛える
- 2 日本についての文明文化をより深く学ばせる
- 3 あらゆる場面で、もっと自由に創造活動を行える環境の形成

やはり、文明化された室内環境や、仕事環境の身でなく、自らの心身を厳しく自然環境に適応させていく鍛錬が必要でしょう。強靱な肉体と精神こそが「偉大な仕事」をなさしめる事が多いのです。iPS細胞でノーベル賞を受賞した山中博士は、今でも、毎日マラソンをして体を鍛えているそうです。

第二に、日本語の持つ可能性を身に付けさせ、日本人の先輩たちの築いてきた文明文化の遺産を傳承し、「守 離 破」の如くに自らの現代の知見や時代の息吹を傳承に加え、統合し、新しい世界を築いて新しい

世界へ離れていく事です。

第三に、そうした事を可能にする為の生活、学問、仕事の環境を与える事です。余りにも日本の制度は全てにおいて、制度疲労を生じ、多くが規制されると共に、その規制が多くなっているし、時代遅れである事が多いのです。

以上三つの事をしっかりと事にやって、日本の若者は世界に冠する仕事をしてくれるようになるでしょう。ただ今日のIT化と脳業社会の到来は、社会がどうあっても勝手に成長し、育つという環境を提供しているのも事実です。従って上の三つをすれば、そうした状況をより良くすることに、より世界と人類の未来に貢献する人々を生み出すことになるのです。

終わりにこの本の内容は、日本(人)論の一部です。もっと沢山の素晴らしさがあります。それをひとりひとりが更に学んで下さい。そして知らしめて下さい。この本を書き上げるに当たって多くのの方々のご支援を受けたことを記し、感謝の念を捧げます。有り難うございました。